

(1) 校内研修計画

1 研究主題

児童が「わかる」国語科の授業づくり ～説明的文章を中心とした授業改善と学習基盤の充実を通して～

2 研究主題について

(1) 研究主題設定の理由

ア 今日の課題から

現代の社会は知識基盤社会と呼ばれ、情報技術の進歩による情報化社会の到来で、常に新しい知識、情報・技術を得ることが社会のあらゆる場面で求められるようになってきた。そうした社会の動きの一方、OECDのPISA調査では、「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題」が見られていることが明らかとなった。(※1) このことから、人間関係において、相手の気持ちを読み取ったり、考えたりする力が低下していると考えられ、社会を取り巻く環境の変化が、人間関係の希薄化という弊害を生んでいると言える。

そこで、学習指導要領改訂が行われた。とりわけ国語科改訂の趣旨においては「特に、言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを重視して言葉で伝え合う能力を育成すること」を重視することが明記された。(※1) つまり、言葉を通して基礎・基本的な指導事項を理解する徹底指導と、それらを使い、主体的に思考・表現する能動型学習のめりはりのある熊本型授業への改善が求められている。

さらに、特別支援教育の理念として「特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障がいだけでなく、知的な遅れのない発達障がいも含めて、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒が在籍するすべての学校において実施されるものである。」と示されている。(※2)

これらのことから、本研究を通してUDの視点を取り入れた授業改善を図ることは、社会の要請に十分応えるものであると考える。

イ 本校教育目標から

学校教育目標は、「家庭や地域との連携のもと 豊かな心を持ち、学力を備え、体力に富む児童を育成する」である。学校経営の基本方針では「教職員の総力を結集して学校教育課題（①思考・判断・表現力を中心とする学力の一層の向上②人権意識や道徳性を基礎とするあたたかい学級・人間関係の形成③体力、危険回避能力、望ましい生活習慣の育成）の解決に取り組むことで、地域を愛し、地域に貢献する人材を育成する」とある。

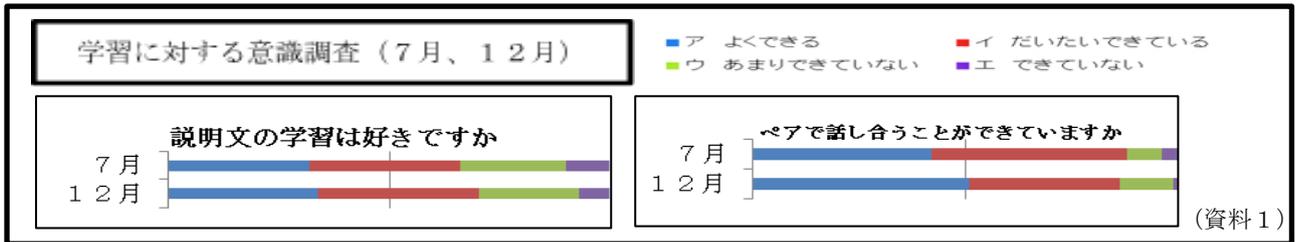
そこで、UDの視点による授業改善を行うことで、すべての児童の「思考力・判断力・表現力を中心とする学力の一層の向上」を図りたいと考えた。更に、職員による知・徳・体の各プロジェクトが学習基盤を充実させる取組を行うことで「あたたかい人間関係の育成」や「生活習慣」などを充実させたいと考え、本研究主題を設定した。

ウ 児童の実態から

【H27年度研究課題より】

H27年度はUDの視点を取り入れた国語科授業の改善を、説明的文章を中心に行ってきた。H27年度

の学習に対する意識調査では、説明文の学習に対する意欲が上昇している。しかし、ペアでの話し合いにおいては、よくできる・だいたいできているという児童の割合が減っている。(資料1)

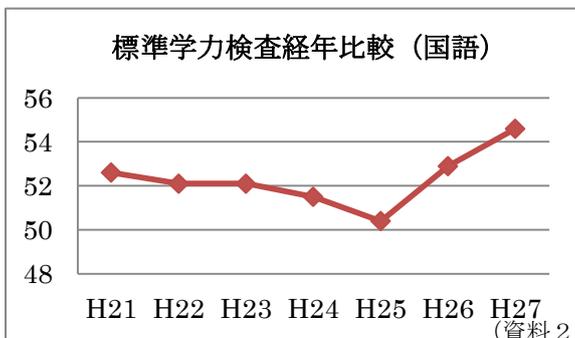


説明文の意欲の向上は、文章全体の構成を視覚的に表現するしかけづくり (読みの家) を実践したことによるものが大きい。文章を俯瞰的に見て、文章の中のつながりを発見するという論理的思考を身に付けることで児童が説明文を「わかった」と感じながら読めていたことが意欲の向上につながったものと考えられる。一方、そうして読み取ったことを活用し、考えを交流することに価値を見出させていない児童が多いことが分かる。

これらのことから、文章の論理的な読み方は身に付き始めているものの、それらを活用し、自らの考えをもつことや、深めることに価値を見出せていないという課題があることが分かる。

【H27年度学力検査等の結果より】

H26年度よりUDの視点を取り入れた国語科の研究に取り組み、学力検査における国語の偏差値においては上昇がみられるようになった。(資料2)しかし、県学力調査の学年別定着率では、高学年になるに伴って多くの観点で県平均を下回っている。また、県平均は上回っているものの、各学年ともに「話す・聞く」に比べると「読む」における正答率は低い。(資料3)



県学力調査県(H27年度)
※県平均を下回っているものは

	総合	関・意・態	話・聞	書く	読む	言語	主に知識	主に活用
4年	854	98	95.2	70.6	79.9	84.1	83.7	90.9
5年	72.8	91.4	92.5	85.6	69.8	61.1	67.2	90.5
6年	68.9	67.1	70.5	69.5	50.6	77.1	72.1	58.8

(資料3)

これらのことから、①学年・学級間の差が大きいこと②読解力において各学年共通して課題があるという2点の課題があることが分かる。

【児童の様子より】

授業中の様子を見ると、耳からの指示が入りにくく視覚的な指示を必要としている児童や、枠の中に文字を書くことができず漢字を覚えにくい児童、文節ごとに区切って音読することが苦手な児童等、特別な支援を必要としている児童が多い。また、普段の生活では、自分の気持ちを言葉で上手く表現できなかったり、相手の意見を聞き入れることができなかったりする場面が多く見られる。これらの児童においては、物事をつなぐ客観的に見て判断する能力や、自分の気持ちを根拠や理由を上げて順序良く伝える経験を多く重ねることが必要である。

これまであげた課題から、UDの視点を取り入れた授業改善を継続的に行うことで、論理的な読

解力・思考力を身に付けることや、自分の考えを伝える活動を充実させ、他者と考えを深め合うことに対する価値を高めることで、思考・判断・表現力を中心とした一層の学力充実を図ることを目指したいと考えた。

(2) 主題についての基本的な考え

ア「わかる授業」とは

「わかる授業」を、具体的な児童の姿として次のように考える。

- 視覚化された課題により、知的好奇心が喚起され、追究したい気持ちになったとき
- 追求したい課題について、自分の考えをもてたとき
- 自分の考えた過程を友達と共有し、共感・納得・深めあえたとき
- 焦点化された指導事項がわかったとき

このような状況に身を置いたとき、児童たちは説明的文章を読んで「わかった」と感じると言える。また、これらの「わかった」という経験の積み重ねが、思考・判断・表現力を中心とした学力の一層の向上につながることを考える。

イ「授業改善」とは

「授業改善」を、ユニバーサルデザイン（以下「UD」）の視点による授業の創造と捉える。

ここで言う「UDの視点」とは、「学力の優劣や発達障がいの有無にかかわらず、全員の児童が、楽しく『わかる・できる』ように工夫・配慮された授業にデザインすること」であると定義づけられる。（※3）「工夫」とは、これまでの教科・領域の授業のあり方を見直し、誰もがわかるように改善するには、どんな要件や具体的な方法があるのかを工夫していくことである。また、「配慮」とは、「個別への配慮」である。児童を理解しようとするカウンセリングマインドの上に立ち、児童の特性に応じた適切に必要な支援を行うことである。

そこで、授業づくりを工夫する際の三要件を、「焦点化」「視覚化」「共有化」とした。（※3）

○授業を焦点化（シンプルに）する。

授業を焦点化するとは、本単元・本時における身に付けさせたい力を明確にすることである。本時の指導事項を絞ることによって授業をシンプルにする。

○授業を視覚化（ビジュアルに）する。

授業を視覚化するとは、視覚的な理解を重視した授業をすることである。写真・挿絵・動作化・図解化・センテンスカードなどを活用することによって、授業をビジュアル化する。

○授業で共有化（シェア）する。

授業で共有化するとは、一人の考えのよさが他の児童に分かち合えるようにすることである。全員が共有できるように友達の発言に対して「共感」「再現」「解釈」「想像」「再構成」させることによって、授業でシェアすることができる。

これらの視点に立って授業を創造していくことが、児童が「わかる」授業へと改善することにつながることを考えた。

3 研究の仮説

(1) 仮説1

説明的文章において、UDの視点に立った授業改善を行い、共有の場の充実を図ることで、児童が「わかる」授業につながるだろう。

(2) 【仮説2】

3つのプロジェクトにおいて、知・徳・体の3つの面から学習基盤の充実を図ることによって、児童が「わかる」授業につながるだろう。

ア「共有の場の充実」について

「共有の場」とは、UDの視点の三要件における「共有化」の場面の中でも、全体での課題に対する共同解決場面のことに絞って研究を進める。また、その場が「充実」とは、児童が以下のような姿になったときのことを指す。（※1）

領域	項目	具体的な児童の姿	育てる時期		
			低学年	中学年	高学年
意欲	1	自分の考えを「伝えたい」「広げたい」と思っている	◎	◎	◎
	2	友だちの考えを「聞きたい」「知りたい」と思っている	◎	◎	◎
話し合い	3	相手意識をもった言葉で話している	◎	○	○
	4	何について話し合っているか考えて話している		◎	○
	5	自らの考えを広げ・深めることを意識して話している			◎
	6	話す順序を整えて話している	◎		
	7	意見→具体例・理由の順で話している		◎	
	8	意見・根拠・理由の順序を自分の考えが伝わりやすいように変えて話している			◎
聞く合い	9	大事なことをとらえて聞いている	◎		
	10	要点をとらえて聞いている		◎	○
	11	要旨をとらえて聞いている			◎
	12	話し合いの感想や質問をもって聞いている		◎	○
	13	自分の考えを広げ・深めながら聞いている			◎
話し合い	14	話し合いの話題に沿った話し合いをしている	◎	○	○
	15	自分の考えと似ているところと違うところを考慮して話し合いをしている		◎	○
	16	互いの立場のもつ意見の良さを認め合いながら話し合っている			◎

イ「3つのプロジェクト」について

本校では校務分掌においてプロジェクト（以下PJ）制をとっており、全ての職員が「勉強上手な一小PJ」「気持ちのよい一小PJ」「元気な一小PJ」の3つのPJに所属している。これら3つのPJを校内研究における組織としても活用し、それぞれのPJで学習基盤の充実のための取組を連携して行うこととする。

4 研究の視点

(1) 【仮説1】について

UDの視点における授業改善では、まず「焦点化」された指導事項の習得を目指して、「視覚化」して課題を提示する。しかし、それだけでは児童が「わかる」授業とはならない。自分の考え方を交流し、お互いに共感、納得、深めあった時にこそ「わかる」授業となる。つまり、課題解決のための思考過程を「共有化」するということを授業者が意識し、コーディネートすることで、「共有の場」が充実し、児童が「わかる」授業につながると考えた。

そこで、以下の視点で研究を進めていくこととする。

①焦点化

- ・ 指導事項の系統（マトリックス型一覧表）の作成による、各教材における指導事項の精選と活用

②視覚化

- ・ 教材のしかけづくりによる、児童の確実な課題把握と、必要感のある「共有の場」の設定

※【国語科におけるしかけづくり】（※5）

- | | | | | |
|----------|-----------|---------|--------|--------|
| ① 順序を変える | ② 選択肢をつくる | ③ 置き換える | ④ 隠す | ⑤ 加える |
| ⑥ 限定する | ⑦ 分類する | ⑧ 図解する | ⑨ 配置する | ⑩ 仮定する |

③共有化

- ・ 授業モデル（「共有の場」の目的・発問・児童の具体的姿を示すモデル）の作成による、「共有の場」の共通実践化
- ・ リフレクションによる授業改善と職員の共通理解

※リフレクションとは振り返りという意味であり、教師が授業実践を反省的に考察する授業研究の方法である。授業中に見られた児童の共有場面を記録し、事後研究会において、記録したのを見ながら、児童の学びを解釈（「なぜ」その事実が起きたのかを考える）し、教師の授業を振り返る。

(2) 【仮説2】について

3つのPJで以下のような視点で学習基盤の充実を目指した取組を行うことで、児童が「わかる」授業につながると考えた。

①勉強上手な一小PJ 「伝え合う力の育成」

- ・ 言語トレーニングの充実
- ・ 学習基盤整備

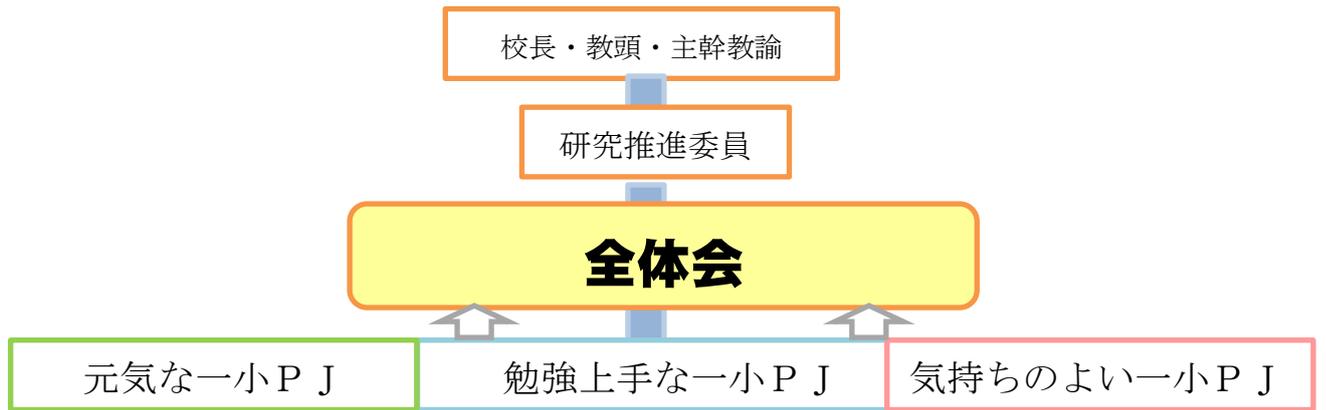
②気持ちのよい一小PJ 「認め支え合う力の育成」

- ・ 温かい学級風土づくり

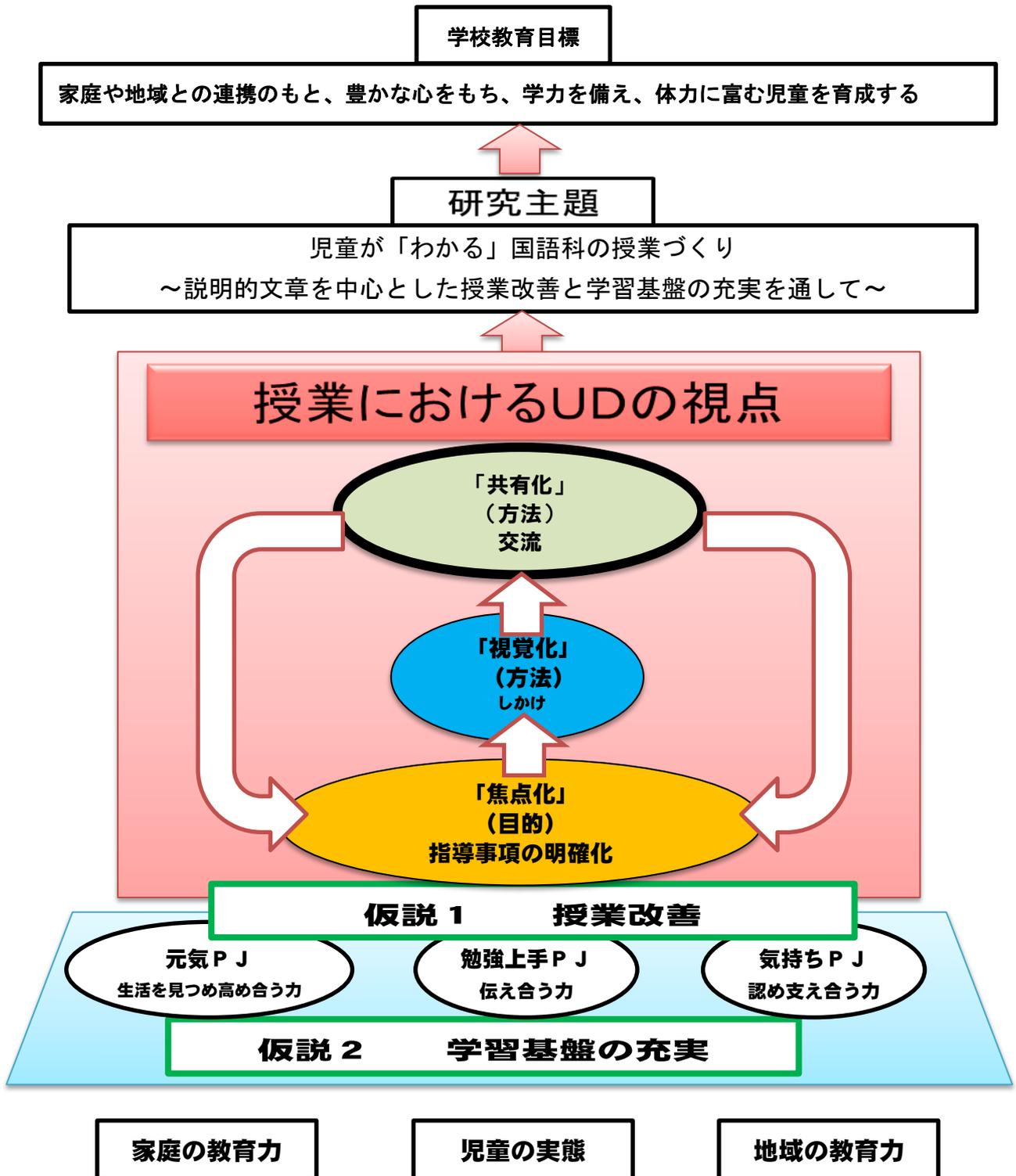
③元気な一小PJ 「生活をみつめ、高め合う力の育成」

- ・ 家庭学習習慣の育成
- ・ アンケートの作成、実施、集計、分析

5 研究の組織



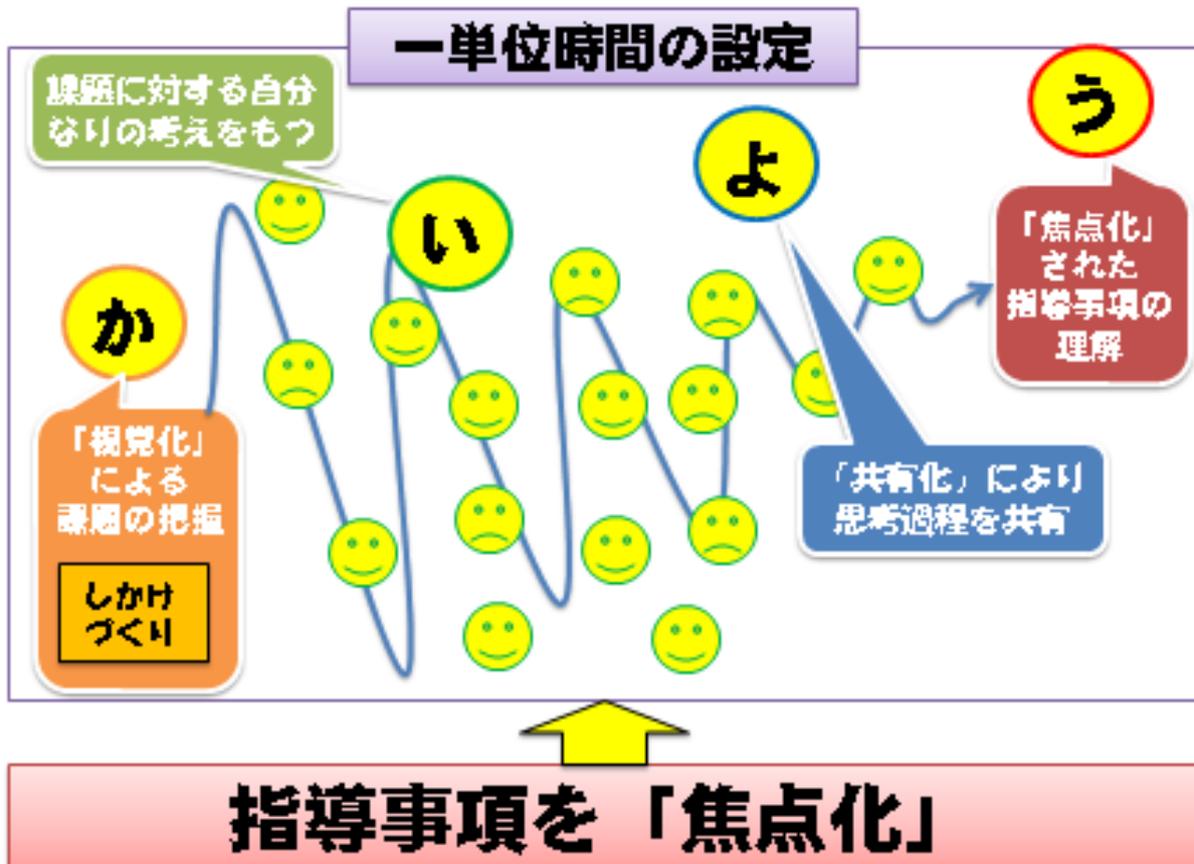
6 研究の構想図



7 1 単位時間の授業展開「か・い・よ・う」の国語科学習における実施

荒尾海陽中学校校区で、児童が「わかる」授業づくりについて協議し、特別支援教育の視点とカウンセリングマインドを土台にした授業づくりに取り組むことにした。授業のユニバーサルデザイン化を図るための授業の三要件「視覚化」「焦点化」「共有化」をキーワードにし、「か・い・よ・う」の学習過程に沿って授業づくりを進め、児童たちが「できそう」「できた」「わかった」と学ぶことを楽しいと実感できる授業を目指すことにした。

「海陽中校区学びの流れ」と「UDの視点」の国語科学習における実施



【参考文献】

- ※1 「小学校学習指導要領解説 国語編」 (H20 文部科学省)
- ※2 「特別支援教育の推進について (通知)」 (H19 文部科学省)
- ※3 「国語授業のユニバーサルデザイン」 (H21 桂 聖)
- ※4 「授業に『しかけ』をつくる国語授業 10 の方法」 (H25 授業のユニバーサルデザイン研究会沖縄支部)